大坪真美子 Mamiko Otsubo

(1974年 兵庫生まれ)



《Chesnut》 2010

日本に生まれ、米国で育ち教育を受けた大坪真美子は、現在ブルック リンのグリーンポイントにスタジオを構える。昨年チェルシーのホー トンギャラリーでNY初個展、今年はデンマーク、スイスでも個展を開 催している。カール・アンドレ、ガートルード・スタイン、コルビュジエ などアート、文学から建築まで作品には多岐にわたる言及が散りば められており、コンクリート、石、鉢植え、本、プラスチックのボールな ど、質感、重量感が違う多様なマテリアルを使う。自らをObject maker (物体制作者)と呼ぶ大坪は目に映る風景を抽象化し、物体と して再構築することで作品に落としこんでいく。ミニマルでありなが ら、ポップでユーモアにあふれた彼女独自の表現で注目を浴びる。 今回は、ニューヨークの摩天楼に着想を得、それぞれのビルを構成す る素材を組み合わせ抽象化した立体作品と、アメリカの象徴とも言え るハンバーガーをモチーフにし、ハンバーガーの名前の中から彫刻的 な繋がりを連想した新作のセラミック、そして美術史の本のページを マスク状に切り抜き表紙とコラージュした平面作品を展示。モノが持 つコンテクストに新たな形状を与えることで別の見方を引き出す斬

新な作品群を紹介。 http://mamiko.biz/

Mamiko Otsubo (Born in 1974 in Hyogo)

The work of Mamiko Otsubo is embedded with a wide range of references from art and literature to architecture, and utilizes diverse materials such as concrete, stone, potted plants, books, and plastic balls providing differing textures and weights. She creates art by transforming into abstraction and reconstructing the landscape she sees as an object. Simultaneously minimalistic and overflowing with pop humor, her art has a unique visual expression.

照屋勇賢

Yuken Teruya

(1973年沖縄生まれ)



《Heroes-Obama》 2011 ©Yuken Teruya Studio

Yuken Teruya (Born in 1973 in Okinawa)

沖縄で生まれ、多摩美術大学を経て、NYのアートスクールを修了した照屋勇賢は、すでに10年以上ニューヨークで作家として活動し、世界中の美術館やギャラリーで展覧会を重ねている。代表作ともいえる「告知一森」シリーズは、マクドナルドや高級ブランドショップなどの紙袋に切り込みを入れ、1本の木を彫り出す立体作品。ビジュアルは繊細でとても美しい作品でありながら、我々が生きる大量生産消費社会への静かな警鐘になっている。また、アメリカに住む沖縄生まれの日本人として、故郷である沖縄の歴史的背景や、アイデンティティそのものも作品の重要なテーマとしているが、今回は沖縄の伝統的染色技法である紅型を使って様々なヒーローを描く「Heroes」シリーズからオバマ大統領を描いた作品を出品。さらに各国の紙幣がその出自に多くの背景を持つことから、紙幣を一つの舞台に見立てた「Green Economy」シリーズより米国紙幣作品を展示。

http://www.yukenteruyastudio.com/

While the appearance of Yuken Teruya's art is detailed and very beautiful, quiet alarm bells are ringing out for the mass-produced consumer society in which we live. As an Okinawa-born Japanese living in America, the historical background of his hometown as well as identity itself are important themes in his work. Several pieces are on exhibition including a portrait of President Obama from the Heroes series which features heroic figures on bingata, a traditional textile dying technique used for kimono in Okinawa.

青崎伸孝 Nobutaka Aozaki

(1977年 鹿児島生まれ)



«Smiley Bag Portrait (Participatory performance)» 2011

鹿児島県出身の青崎伸孝は、日本の大学で教育学を学び、その後、 渡米してハンターカレッジを卒業したという異色の経歴。現在はブ ルックリンのサンセットパークにスタジオを構える。NYの美大在学 中から様々な賞を受賞し卒業後は著名ギャラリーであるマリアン・ ボエスキーで個展の場が与えられるなど活躍の場が広がっている。 大量消費社会を象徴するチープで日常的な素材を使った作品や、 身の回りのコミュニケーションに発想を得たパフォーマンス的作品 が主だが、どれもアートヒストリーを踏まえ、彼らしいユーモアあふ れるポップでミニマルなビジュアルが美しい。出品作品は、どこにで も売っているポテトチップスの背面を色コード化されたエナメル塗 料で塗りつぶし、ハイアートの象徴ともいえる幾何学抽象絵画を作 り出している「Chips Painting」シリーズと、街の似顔絵師に着想を 得て、NYで安いデリなどでよく使われるスマイリーがついたビニー ル袋に無料で似顔絵を描く、通行人参加型のパフォーマンス作品 《Smiley Bag Portrait》。

http://www.nobutakaaozaki.com/

Nobutaka Aozaki (Born in 1977 in Kagoshima)

Nobutaka Aozaki's art focuses primarily on artwork created from the cheap, everyday goods that symbolize mass consumer society and performance art that draws inspiration from the communication going on around him. While his pop and minimal visuals overflowing with his unique sense of humor are beautiful, his works often have references to art history. On display are his Chips Painting series where he applies industrial enamel paint onto the backsides of potato chip bags to create geometric abstractions. He will also be performing his participatory work Smiley Bag Portrait where he paints smiley face portraits of pedestrians for free.

大山エンリコイサム Ōyama Enrico Isamu Letter

(1983年東京生まれ)



Image of the work

日本人の母、イタリア人の父を持ち、東京で生まれ育った大山エンリコイサムは、昨年、拠点をNYに移し、現在ダウンタウン・ブルックリンにスタジオを持つ。

少年時代に父の祖国イタリアで見たグラフィティに影響を受け、グラフィティの構造その視覚言語を抽象化、脱構築し「クイックターン・ストラクチャー(Quick Turn Structure)」と呼ぶビジュアルパターンを作り上げた。自己の身体的なスケール感との関連性を確かめながらこのQTSパターンを積み重ねていくことで、巨大な壁画から小さな素描まで数多くの作品を作り出している。

今回は、このQTSのコンセプトをさらに押し進めて、カッティングシートを使用してモチーフが自身の身体性を離れてQTSが増殖していくかのような、ガラス窓を横断するインスタレーション作品に挑戦。同時に、フリーマーケットなどで見つけた古いプリント作品の上に繊細なOTSを重ねる美しいドローイング作品も日本で初めて展示する。

http://enricoletter.net/

Ōyama Enrico Isamu Letter (Born in 1983 in Tokyo)

Influenced greatly by the graffiti he saw as a child in Italy, his father's ancestral homeland, Ōyama Enrico Isamu Letter has created his own unique visual pattern called "Quick Turn Structure" (QTS) by creating abstraction from and deconstructing the structure of graffiti. As he confirms the relationship with the scale of his own body, he layers this Quick Turn Structure, and by doing so, has created many works of art from massive murals to small drawings.

ヒシャム・アキラ・バルーチャ Hisham Akira Bharoocha

(1976年新潟生まれ)



《Bird Call》 2009

日本人の母、ビルマ人の父を持ち東京で育ったヒシャム・アキラ・バルーチャは高校卒業後渡米し、米国の美大を卒業したあと90年代後半からニューヨークにて作家活動をはじめる。ビジュアルアーティストとしての活動の傍ら、在学中から音楽活動も勢力的に行っており、現在はソロだけでなく、ボアダムスやソニック・ユースのキム・ゴードンとのコラボレーションも行っている。音楽、ファッション、写真などクロスボーダーな活動とともに作り出されるビジュアルアートは、絵画、

ドローイング、そしてコラージュと様々な技法が使われ、偶発性に富

みサイケデリックなテイストを持つ。今回は、新作のコラージュ作品に

加え、会期中に会場でのライブペインティングや音楽イベントも予定

http://hishamb.net/

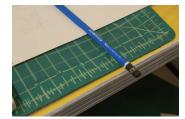
されている。

Hisham Akira Bharoocha (Born in 1976 in Niigata)

In addition to Hisham Akira Bharoocha's activity as a visual artist, he is also powerfully engaged in the musical activity he has done since school. Currently, he is not only active as a soloist but collaborates with musicians such as the Boredoms and Sonic Youth's Kim Gordon. The visual art he has created, along with his cross-border activity in everything from music to fashion to photography, utilizes techniques from painting, drawing and collage; It is rich with chance operation, and psychedelic in taste.

江口悟 Satoru Eguchi

(1973年新潟生まれ)



«Studio» 2007

新潟で生まれ、98年からニューヨークに移り住み、アートスクール卒業後作家活動を展開する江口悟。NYのジャパンソサエティー、神奈川県民ホールギャラリーでのグループ展や、ゲント市現代美術館での個展、そして最近では銀座エルメスのウィンドウでのインスタレーション等が大きな注目を集めた。

日常生活で使う文房具や調理器具から家具まで、現実にあるものを自身の筆致で写し取った、紙でできた立体作品を組み合わせたインスタレーションは見る者を戸惑わせる。立体作品でありながら、素材を重視する彫刻作品とは違い、あくまでその表面を模倣して空間を作り出す絵画的なアプローチがユニーク。本展では、散らかっているように見えて実は整然とした作家のアトリエの一部を再現する。

http://satorueguchi.com/en/

Satoru Eguchi (Born in 1973 in Niigata)

Satoru Eguchi bewilders those who view his installations put together from physical items meant for everyday use such as stationery, kitchen utensils and furniture all made from paper as if he had taken them from real life. While they are three-dimensional, unlike sculptures which place importance on material, Eguchi's pieces only imitate their subjects on the surface. The installation is unique in taking a painter's approach rather than a sculptor's.

河井美咲 Misaki Kawai

(1978年 大阪生まれ)

a

《HOMELAND 2020》 2009 © Misaki Kawai Courtesy of Take Ninagawa

Courtesy of Take Ninagawa Misaki Kawai (Born in 1978 in Osaka)

大阪で生まれ育ち、アジアの各地を渡った後90年代後半からニューヨークで作家活動をはじめた河井美咲は、MoMA PS1やボストン現代美術館、スウェーデンのマルメ美術館などでの個展や、日本のワタリウム美術館での二人展など、世界中で活躍している。アンダーグラウンドカルチャーから強い影響を受けた河井の表現は、絵画、立体、パフォーマンス、音楽そしてアーティストジンと幅広い。チープで日常的な材料に、非現実的なカラフルでビビッドな色使いの組み合わせが特徴的。日々の生活や、絶えず出かけていく海外での滞在からインスピレーションを受けた、動物や、人、風景など、楽しくてポップで動きのあるモチーフを得意とする。本展では、地球を遊園地に見立てた立体作品に、ビデオアニメーションが加えられた大作インスタレーション《HOMELAND 2020》(2009年制作)をグレートホールに展示。

http://www.misakikawai.com/

Misaki Kawai was heavily influenced by underground cultures and her works encompass a wide range of genres including painting, sculpture, performance art, and artist zine. The use of cheap, everyday material and fantastic and vivid colors are characteristic of her work. In this exhibition, the large-scale installation Homeland 2020, a diorama-like landscape with video animations, is displayed in the elevator hall.

ムラタ・タケシ Takeshi Murata

(1974年米、シカゴ生まれ)



《I, Popeye》 2010 Courtesy of the artist, Salon94 and Ratio 3

日本人の父親、米国人の母親のもと、米国で生まれ育ったムラタ・タケシ。美大卒業後ブルックリンやロサンゼルスに住み、現在はNY郊外にスタジオを構える。ロサンゼルス現代美術館での大規模なインスタレーションや、NYのデザイン美術館での個展、そして、昨年11月に1ヶ月の間、タイムズスクエアの15もの巨大スクリーンでビデオ作品をスクリーニングされるなど近年大きく注目されている。CGで作り上げられたバーチャルリアリティー空間内での物語性を帯びたアニメーションから、サイケデリックな抽象パターンによる動画、そして映画を引用してオリジナルから全く違ったビジュアルに抽象化する作品など幅広い。今回は、ポパイの版権の期限がヨーロッパと米国で違うことに端を発した《I, Popeye》と彼が日本を訪れた際にレコード店で偶然見つけた日本の80年代のCM集をモチーフにした《Shiboogi》を展示。

http://www.takeshimurata.com/

Takeshi Murata (Born in 1974 in Chicago)

The wide spectrum of American-born Takeshi Murata's work encompasses narrative animation told in the space of CG-generated virtual reality to psychedelic abstract patterns of video as well as works that reference movies to create unique visual abstractions. In this exhibition he displays two works, I, Popeye which stems from the difference in a copyright's term in Europe and America, and Shiboogi which takes as its motif a collection of 1980s TV commercials he discovered by chance at a record shop in Japan.